

# 教育実習Ⅰ（幼）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 講師 上 村 加 奈

## 1 はじめに

教育実習Ⅰ（幼）については、一昨年大きく改訂し昨年度見直しを行った。今年度の実施概要は、昨年度を継承して大きく変更せずに実施した。

本学において幼稚園教諭一種免許状取得を希望する学生は、教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを段階的に学修する。教育実習Ⅰの履修前に、ほとんどの学生が選択科目である教育実習Ⅶを履修するため4段階の学びとなっている。教育実習Ⅰは学内での学修を基本とし、幼児教育の基本にもとづく実践力を養成することを目的としている。続く幼稚園における実習となる教育実習Ⅱを見据えている。そこで、授業のねらいを教育実習Ⅱに臨む前に、教育実践力を培うとしている。

培う力として、①保育の基礎理解・子ども理解②保育指導案を立案する力③教材研究をする力④保育を展開する力（子どもの様子を観察し、実態把握をする力・子どもの実態に応じて働きかける力・集団と個人に対応する力）⑤基礎技能の5点を挙げている。

## 2 実施のスケジュール

項目	授業回	主 な 内 容
全体指導 指導案の書き方	第1回	オリエンテーション（教育実習Ⅰの位置づけ 授業のねらいと概要・実習資格）
	第2回	指導案立案の要点 模擬保育Ⅰの指導案の内容（6月の指導計画から考える）
	第3回	指導案の立案と書き方（プレゼンテーションによる話題提供 意見交流） 指導案検討
グループ別模擬保育	第4～8回	模擬保育Ⅰ（3・4・5・歳 各2回） 指導案検討（4回）
全体指導 中間まとめ	第9回	模擬保育Ⅰのまとめ 模擬保育Ⅱに向けて（年間指導計画から考える） 指導案検討 教育実習Ⅱに向けて
グループ別模擬保育	第10～14回	模擬保育Ⅱ（3・4・5・歳 各2回） 指導案検討（2回）
全体指導 学修のまとめ	第15回	教育実習Ⅰのまとめ 教育実習Ⅱに向けて

### 3 活動の概要

授業全体を3部構成にして、指導案の立案と書き方、模擬保育Ⅰ、模擬保育Ⅱとした。教育実習Ⅱを見据えて、実習資格を意識して学修姿勢向上に取り組むように指導した。

#### (1) 授業の概要

##### ①指導案の立案と書き方の学修

既存の知識を基に、指導案の立案と書き方の要点を学修する。立案した指導案をプレゼンテーションして質疑応答や意見交流をすることで、具体的な事項の理解を図った。2年前期までの学修を基に、子どもにとっての遊びの意味を考えながら指導案を作成する。書き方は幼児教育課程論や保育課程論の授業の学びと関連させて、段階的に学修できるようにした。

##### ②模擬保育Ⅰ

教育実習Ⅱの実施時期である6月の指導計画を基に指導案を立案した学生が保育者役となり、他の学生が子ども役となって模擬保育を行なう。模擬保育の後に協議会をもち、実践の振り返りを行った。保育者役と子ども役の両者の視点で意見交流を行った。

今年度から評価票（活動の分析力・構想力・展開力・表現技術・他者との連携）を導入し、身につけることが望まれる力を意識した取り組みと実践後の自己評価を課した。

模擬保育Ⅰが終了した時点で「まとめ」の時間を設けた。学びの確認と疑問点の洗い出し、模擬保育Ⅱに向けた取り組みを考える内容で授業を行った。さらに本授業が教育実習Ⅱに繋がっていることを意識できるように、教育実習Ⅱの概要と今後の取り組みを提示した。

##### ③模擬保育Ⅱ

模擬保育Ⅱでは、模擬保育Ⅰの学びを踏まえ年間指導計画を基に、実践する月を決めて指導案立案に取り組む。授業後には、学びを振り返って改訂指導案を作成する点である。

#### (2) 学生アンケートの結果

第14講終了後に実施した学びの振り返りに関するアンケート結果は次の通りである。（回答率95.8％）5件法での回答をまとめたものである。

##### ①指導案の書き方理解と教材研究の理解・評価票の役立ち度

		5	4	3	2	1
指導案	子どもの実態	9 (19%)	24 (52%)	12 (26%)	1 (2%)	0 (0%)
	ねらい	4 (8%)	27 (58%)	15 (32%)	0 (0%)	0 (0%)
	設定理由	3 (6%)	30 (65%)	12 (26%)	1 (2%)	0 (0%)
	導入	5 (10%)	23 (50%)	18 (39%)	0 (0%)	0 (0%)
	展開	2 (4%)	33 (71%)	11 (23%)	0 (0%)	0 (0%)
	まとめ	1 (2%)	26 (56%)	18 (32%)	1 (2%)	0 (0%)
教材研究		3 (6%)	22 (47%)	20 (43%)	1 (2%)	0 (0%)
評価票の役立ち度		16 (34%)	21 (45%)	9 (19%)	0 (0%)	0 (0%)

##### ②模擬保育Ⅰを終えて模擬保育Ⅱを行ったことによる学び（自由記述より抜粋）

- ・子どもの実態に沿った活動を考えることの難しさや事前準備の大切さ、子どもたちへの言葉かけの難しさを学ぶことができた。ねらいに則した指導案の書き方を身につけることができた。子ども役になってみて、それぞれの年齢における発達過程を知ることができた。

- ・人前で話すことへの抵抗がなくなった。声かけの仕方や絵本の読み聞かせを実践することができた。子どもの実態に合った活動をするために考えることはできたが、教材を選ぶことが難しく、まだまだ教材研究が足りないと感じた。
- ・指導案の書き方が一番自分にとって大きな成長になったと思います。模擬保育Ⅰで行った教材研究なども生かすことができました。

## 4 成果と課題

### ①学生の学びの整理と教授法の再考

アンケート結果から、学生が学ぶべき内容を自覚し一定の知識を獲得したことの確認は出来た。しかし、まとめの理解の低さは指導案全体の理解が曖昧であることが要因とも言える。この課題を中心に教授法の再検討に取り組みたい。また、理解度が低いと回答した学生の指導を検討する。

### ②省察する体験

評価票の導入により、本授業で身につけることが望まれる力を学生が具体的に意識できた。模擬保育Ⅰに続いて模擬保育Ⅱを行ったことで段階的に到達目標を意識して取り組むことができた。近年、保育の質向上に向けて省察する力が求められている。養成校での学修を通して省察する機会を意図的に設けて実践力を養っていきたい。

### ③自主的な取り組み

同時期に4年生の教職実践演習が開講されており、模擬保育を行なう授業が設定されている。学生から4年生の模擬保育への参加希望の申し出があった。環境を整えると自主的に受講学生の75%が参加して学びを深めた。2年後の姿や目指す実習生像が明確になった様子が伺えた。子どもの自主性を育てることが求められる保育職を目指す学生にとって、この時期に自主的な取り組みによる学びの体験ができたことが今後に繋がることを期待したい。

### ④子どもとの関わる体験

本授業を通して、学生が子どもの実態を理解しておくこと、子どもへのかかわり方を知っておくことの重要性を再認識する。特に応答的にかかわる部分の対応力を高めるためには、実際に子どもと関わった体験の有無や頻度が影響する。他の授業や自主活動により子どもとの接触体験がもてるような環境と指導を更に検討し、実施方法を工夫していく必要がある。